いのちの唄

ふじさき正三

＊はじめに

私は、ある特別養護老人ホームに入居し、七年近くになる者です。

五十二歳のころ、脳内出血で倒れ、病院生活が長く続きました。

この長い生活の中でいろんな人と出会いました。入院中、ここに登場する高森鉄平さんとはよく話をしました。

私は苦しい痛み、リハビリとの闘いを耐えましたが、後遺症が残り、左半身は「マヒ」となり、身体障害者二級・介護二級の診断を受け、病院から直接この施設にきましたが、一、二年は病院の延長にすぎませんでした。今は、施設の生活になれたのか、そんなに抵抗はありません。

今でも左手はまったく動かず、しびれて痛いです。左足は少し動きますが、しびれて痛いです。この痛みは死ぬまで続くでしょう。

だんだん歳をとっていくせいか目も悪くなり、退院したときにも足の動きはにぶく感じ、介護も三級に変わりました。

入居した時は、杖をついて歩いていましたが、現在では車椅子の状態に変わっていきました。時々車椅子をとって歩く練習をしています。でも、身体の痛みは強くなっていっているし、口からのよだれも多く出るようになり、字を書くと間違えが多く、時間がかかるようになりました。これも自分との闘いかもしれません。この闘いは死ぬまで続くでしょう。

今は風呂に入るとき、服を着替えるとき、物が枕から落ちたとき、寝床がみだれているときなど……は、介護士さんに手伝ってもらっています。原稿を書くとき、片手だけですので辞典も引くこともできませんので、よく当て字があると思います。でも一生懸命に身体も動かず痛い中、少しずつ書いた短い作品です。私はこれ以上書くことができません。私はなぜか最近書いていくうちに、忘れていくのです。一日一時間ぐらいの文章は書けるのですが、それ以上は無理になっていきますので、エッセイ、詩を中心に書いていきたいと思っています。

さてこの作品ですが、私が入院している時に出会った人の体験。白血病という病気と闘いながら亡くなった、鉄平さんの娘さんのことを聞きながら書いたものです。それと、目の不自由になっていく女の子の母親の想いを聞いた話を書いたものです。この二つの話は

私が忘れてはいけないと思い、文章にすることに決めたものです。
この話を多くの人に読んでもらい、一人でも夢や希望が持てればいいと思いながら書いたものです。どうかよろしくお願いします。

第一章　笑顔

（一）出会い

私が脳内出血で倒れ、病院で入院し、心も身体も落ち込んでいるとき。気持ちが落ち着かず、また非常に夕焼けが美しかったので、病院の屋上に車椅子を少しずつ動かしながら出てみた。夏だったので心地よい風が吹いていた。

そこに悲しそうに夕焼けを一人見ている女性の姿があった。近くには誰もいない二人だけの世界、その女性の姿は、色が白く天女のように夕焼けの赤い光に佇んでいた。

私は、その女性になんとなく声を掛けてみた。「今の夕焼けはきれいですね」と突然言ったので、その女性はびっくりした様子であった。しばらく沈黙が続いて、「この夕焼けはどこからきたのですかね。素晴らしいですね。街も真っ赤に染まっていますね」と私にやさしく返事をくれた。

私より二〇歳も三〇歳も年下である。私の娘か孫ぐらいか若いのかわかりません。とても笑顔が素晴らしい娘さんでした。たしかに美しい娘さんだ。どこかの歌手みたいな気がしました。

お互いに沈黙が続き、素晴らしい夕焼けにみとれていました。私の落ち込んだ気持ちも薄くなってきました。病院の屋上から見る外は、忙しそうに走ったり歩いたりする人、自転車に乗った人、自動車の走る音が聞こえてきます。だけど夕焼けは静かに二人を染めていったのです。沈黙が終わり、私は寂しかったので、いつもの長々とした私の話をしましたが、娘さんは嫌な顔もせず、笑顔で私の話を聞いてくれました。私の恋人に話しているような気持ちになり涙がこぼれそうになりましたが、ためらっていました。その時です、娘さんが、笑顔で私の目を見て「おじさん、泣きたいときはそんなに我慢せず泣けばいい、言いたいときは言えばいい、と思いますが」と言ってくれました。娘さんのその笑顔は観音様のように思えました。私の一方的な話です。私は話しているうちに親しみを感じてきました。

今度は私が娘さんの話を聞く番です。その時、看護師さんが呼びにきました。もう夕焼けも薄く、あたりは薄暗くなってきましたので、街の灯もちらほらついてきました。私は娘さんに私の部屋の近くまで車椅子を押してもらっている途中に、先に私の名前を言って娘さんの名前を聞くと、「私、高森奈美です、よろしくね」と言って翌日会う約束をして別れました。

私はその夜はあまり眠れなかったので、娘さんと会う時間が長く感じました。会う時間

がやってきました。私はなぜか胸がドキドキしながら、恋人と会うような気持ちになり、約束の時間にいってみると、もう娘さんは来ていました。それからは娘さんのことを「奈美」と言うことにしました。

「昨日はごめんね、私のことばかり話してね」と言うと奈美は笑顔で「おじさん、ありがとう。いっぱい、いっぱい、話をしてくれて」と言って悲しそうに涙を浮かべていました。でもすぐ笑顔に変わったのです。

「おじさん、私ね、ある小さなホールで歌を唄っているの」

たしかにそんな気はしました。

「それとね、私、青い空と太陽が好きなの。この病院にきたのは、ガン検査のためにきたの。あの夜、検査だった。もう一度検査があるので昨夜は病院に泊まったの」

その時です。奈美といろんなことを話していると、看護師さんがやってきて「高森さん、検査の時間ですよ」と呼びにきた。

奈美の顔を見上げると、いつもの笑顔はなかった。私がとっさに「大丈夫ですか」と聞くと、笑顔に変わり「大丈夫だから行ってくる」と言って検査病棟に入っていった。

私は呆然として屋上にいたが、心配でならなかった。それから夕暮れになって待合室にいると、私の後ろから「私は奈美の父ですが、娘の話を聞いてくれてありがとうございます」

私は自然に頭を下げる。奈美、父さん鉄平、母さん加代子、妹はるみと父親の鉄平さんが紹介してくれました。それから検査の時間の間に、私に奈美さんのことをいろいろ話してくれ、それから奈美さんの家族とも親しくなり、特に父さんの鉄平さんはなんでも話してくれるようになり、毎日のように私のところに来てくれました。

ある日、鉄平さんが真剣な顔をして私にこう言うのです。「じつは……奈美は、急性骨髄白血病かもしれません。また奈美に話していませんが、もっと検査が必要とのことです。このことはまだ奈美には話さないでください、お願いします」といって涙ぐんでいました。そんな家族はどんな気持ちだろうか。まだ、最後の診断は出ていないのだから、と、私は思った。その時、父さんが私に「これが奈美がつくった詩です。時間があれば読んでやってください」と言って、メモに書いた一枚の詩を手渡してくれた。

孤独の夜

はるかなる空と広い海の
はざまを行く、あなた。
終わる日もない
孤独の夜
私をのせて、宇宙をただよい

勇気を出して
この時代を優しさと愛をのり越えて行くの……
正しい力を合せて
生きて行こう
いのちの終わりがある私。
地球の空と宇宙の
はざまを行く、あなた
その名は時でしょうか
終わる日もない
孤独の夜
私をのせて宇宙をただよい
勇気を出して
この時代を優しさと愛をのり越えて行くの……
伝えて
祈って
世界に静かなる日をください
正しい力を合せて
生きて行こう
いのちの終わりがある私。

奈美

私はこの詩を鉄平さんからもらって感動した。もう奈美さんは自分の病気を知っているようにも感じた。鉄平さんも同じように感じたそうである。

（二）白血病の告知

父鉄平さんはこんなことを語る。

おそらく自らのいのちに終わりがあることなど、奈美自身にも、まるで思いもよらぬことだっただろう。

だが、その頃から奈美は身体の変調を感じるようになる。どんなに調子が悪くても表情には出すことがなかった奈美。

「ちょっと、だるいな〜〜」ともらす。

クリスマスの日、三ヶ月前に血液検査をした時、まるで異常は見られなかった。それから微熱は続くが、誰しも風邪だと思い込んでいたのです。それからしばらくして病院から

電話があり、病院で血液だけ採取するように言われました（その時でしょうか、初めて会ったときと思います）。でも、その夜は病院で一泊していた。

そして、私と妻とはるかで心配しながら話を家でしていると、病院から家の方に医師から電話があり、「実は……血液検査で、異常な所見がありました。もう一度、調べなくてはいけませんので、このまま入院しなくてはいけませんので、入院の手続きをしてほしいのですが」

昨日、また鉄平は、病院に行って入院の手続きをしたのです。その日に、医師から奈美に「申し訳ないのですが、骨髄液を採取します」と言われ、奈美は「えー」と息を飲み込んだのです。

骨髄に針を刺して骨髄の中の血液を採取する。怖さのあまり、泣きながら検査を受ける奈美でした。

待合室には私と妻と妹が心配しながら待っていたのです。

それからしばらくして医師が現われ、告げる。「血液検査の結果では、骨髄性白血病です。すなわち、血液のガンです」そんなことを私と奈美が医師から説明を受けていると、奈美は目に涙をいっぱい浮かべ手を震わせ、それを私は握りしめ、「大丈夫だから」と言った。横についていた妻に奈美が「母さん、私、頑張るから」と言い、妻は大粒の涙を流し、奈美の手をしっかり握り締めていました。

それでも、私は涙をこらえて病院の窓を見ていました。奈美は涙をふいて、医師に向かってこう聞いたのです。

「先生、後日、私のコンサートがあるのです。そのコンサートをやりたいのです。やってもいけないのですか」

医師の前に奈美は繰り返した。

「……どうしても、やらなくてはいけないのですか」と言う医師、「先生お願いですから、先生が付いていてくれただけでいいのです。せっかく楽しみにしているお客様がいるのです。舞台でなにがあっても、私は本望ですから」医師はそんな奈美をなぐさめる。

医師は奈美にこう告げたのです。

「その気持ちはよくわかるのですが、それはちょっと待ってもらいましょう」

それを聞いた奈美は「わあ～」と声を上げて泣きじゃくった。

白血病にもかかわらず挑戦し、新しい自分を見つけた。そんな自分を待ってくれる人たちのため、厳しい病気との闘いに直面してもなお、最期まで舞台に立ちたいと願い続けたい奈美でした。

その胸には想いや夢があふれていたのです。かつて、奈美が笑顔で言っていた。『怖いけど、やりたいと思った瞬間にチャレンジすることが大事なんです。挑戦って、すごく勇気がいるのです。そしてチャレンジはチャンスにつながっているのです。あるとき太陽みたいに開いてくださったら光を与えられる。ホールの舞台で歌手として唄いたいと思っているのです』。奈美の唄でありますそれは、

ささやかな幸せと
好きな歌を信じ
心、おだやかな朝
かかれた手紙
いまは
すべて輝く
すべて眩しいほどに
駆け、まわることをなく
素直に感じること
風が気持ちよいこと
ただ……
忘れていた日々は
すべて生かされています
日々はいつも
新しくなるのです

そして、奈美が想うことを詩にしましたものです。

あたりまえのことばたち
『ありがとう』
『おはよう』もあたりまえのことばです
美しく思える
そんな日々がある
振り向けば
そこにいておしゃべりして笑って
ひとりながらいま生きている
それを教えてくれたとき愛がある
あたまりまえに朝が来る
光る海も
雨の街も
あたりまえのことなのに
かげがいのない日
生きる意味は
生きること提しながら
生きるために

生きるのです
かけがいのない日々も
ただ抱きしめていま
そこにあるその幸せを……

と奈美は詩をつくった。

それから奈美に医師は正式に「急性骨髄性白血病」と告知したのです。

告知をした医師は、日本全国的にも白血病の専門グループのメンバーの一人であった。現状では最善と言われる治療を施行することを話し、奈美はそのまま無菌病棟へ入り、治療を受けることになった。

染色体検査が判明した。「急性骨髄性白血病にもいろんなタイプがあり、非常に治しやすい人と治りにくいタイプがあります」と言われ、奈美の場合は「検査の結果を見た時、本当に一番あってはならない染色体異常が出たのです。治る可能性が低く、しかし急性骨髄性白血病の中でも2％ぐらいしかない、世界の白血病患者の中でも何万人に一人ほどの珍しい染色体異常だったのです」とその医師は語っていました。

白血病とは、血液または骨髄の中に白血球細胞が異常に増加する病気で、一般的には治療しなければ数週間の単位で死に至る急性白血病と、臨床経過が数ヶ月以上の慢性白血病に分けられるかと思う。

私は毎日のように病院に通い無菌病棟の個室にいる奈美とガラス窓越に電話して話したのです。奈美が気にかけていることは、仕事のことや家族のことばかりでした。自分が苦しいことなど一切話しませんでした。個室にはテレビ、ビデオなどもあるのに見ようとはしていないのです。本は少し読んでいましたが、抗ガン剤の副作用でだるくなり、寝ていることが多いのでした。

この無菌病棟の中には医師と特定の看護師しか入れないのです。私はガラス越から無菌病棟にいる奈美が病気と闘っている姿を、よく写真に撮り続けました。奈美も自分が気分のいいときにはデジタルカメラで見舞いにきてくれる人を内側から楽しそうに撮っていました。そこでも奈美は、苦しい、辛いという言葉は決して言わなかった。訪れる人の前では誰よりも明るく振る舞う奈美の姿がありました。

だが、私は思いがけない奈美の姿を見たのです。夕暮れまで奈美のところにいて、私が病室を出るとき奈美は「父さん、バイバイ。運転に気をつけてよ」と言いました。私は玄関先まで行った時、携帯電話を病室のガラス窓のところに忘れたことに気づき、急いで病室に戻りました。そこに肩を震わせて、わんわんと泣いている奈美の後姿を見たのです。

その光景は今でも忘れられません。あんなに明るく話していた奈美だったのにと思って携帯電話だけ持って帰ろうとした時、奈美は私のことに気づいたのか、涙をふいて笑顔で「何か忘れたの？　バイバイ」と言うのです。

そんなことを語ってくれた鉄平さんがいました。

それから鉄平さんが言うにはこれから奈美は完全寛解に入るのです。これは抗ガン剤治療のひとつだそうです。それから医師団は早期から骨髄移植治療法を考えていました。骨髄移植治療法とは、骨髄を正常な骨髄と入れかえる治療法です。白血球の型が全部またはほぼ一致したドナーから正常な骨髄を採取して移植するのです（医学書より）。

ドナーは通常は親子や血縁から選ばれますが、奈美の場合は私も妻も妹も該当しなかったのです。もとより血縁者でも白血球の型があるので確率は低いと言われていました。医師団は、骨髄バンクに登録されていたが早くとも三ヶ月はかかる。それまではもっと早い状態で病気は進行していく。と聞いていた奈美はそれでも笑顔はたやさなかった。医師の話によると「私が毎週一回、回診に行くといつもニコニコしていて部屋中はとても明るいのです。いつも楽しく話をしてくれました。非常に辛い時期はありましたが、その時は落ち込んでいてもすぐ笑顔になっていましたね。そして奈美でも、骨髄穿刺の前には泣いていましたね。」

骨髄穿刺とは、胸骨（前胸中心部の骨）または腸骨（いわゆる腰骨）に針を刺して骨の中心部から骨髄液を採取する検査である。その骨髄液で白血細胞の状態を調べるため、最低でも一ヶ月に一度おこなう。なんとも言えない痛みを伴うため、局部麻酔をしておこなうが、それでも痛みは感じる（医学書より）。奈美はそうした検査でも嫌いではなかった。病室から見える澄んだ青い空、そして太陽の光が差してくるので、奈美は嫌ではなかった。いつも、その病室で医師が「骨髄穿刺をするよ」と言うと奈美はぽろっと涙を流した。奈美は骨髄穿刺が終わるとすぐもとの笑顔に戻っていた、と医師は私に語った。「奈美さんが入院している無菌病棟にはそれぞれ病状は違いますが、一緒に病気と闘っている人たちに、奈美さんは言葉を交わし、ともに頑張る気持ちを分け合って、そんな患者たちの姿が温かく見守っています。白血病の方はやはり、みんな前向きで、他人は暗いと思いがちですが、そんなことは全然ないのです。むしろ病気でない人よりも、生きていることを前向きにしていることがありありとわかりますよ」と言われ、私は涙がこぼれましたよ。

と部屋にきて、鉄平さんが話してくれました。

その時、私は、いろんな病気と闘っている多くの人がいて、私も頑張ってこの病気と闘っていかなくてはと思いました。

そして鉄平さんが奈美を想う気持ちがありありとわかり、私ももらい泣きをしたのです。

（三）奈美からの手紙１

「子供も、大人も、おじいちゃんも、おばあちゃんも、みんなみんな笑顔が素敵、怒っている顔より笑顔が一番。きっと笑顔が幸せを呼ぶ、頭では分かっていても心ではなかなか分からないが、心を開いて、心の目で周りを見渡してごらん。きっと小さな幸せの芽が見

つかる。でも人は生きていて、つらい時、勿論、沢山あると思う。その時は、あせらないでね。自分だけが不幸せでないよ。もっと心が暗い闇に閉じ込められている人たちも沢山いることも少しだけ思い出してみてね、自分の方で心を開く人もいれば、誰かの愛を受けて心を開く人もいる。気づかないうちに心を開いている人もいる、それぞれ人は違うが、人は心を閉めたり開いたりする色々な経験がある。そして沢山の心を感じることによって、豊かな心を持ち、豊かな笑顔を育てて行かなくてはならないでしょうと私は想う。自分自身、豊かな笑顔が増えればきっと周りも笑顔で幸せを届けることができるでしょう」「笑顔が一番」　　奈美より

私はこんな手紙がきて本当にびっくりしました。苦難病と闘いながらこんな手紙をいただき、私は病気と闘っていかなくてはと想ったのです。心から感謝の気持ちでいっぱいでした。まだ私には手紙を書く力はありませんでした。私も一生懸命に返事を書いて出そうと想っていたのですが……

（四）夢の中

私は手紙の返事は出していませんが、後日またこんな手紙が届きました。

「手紙を出しましたが読んでくれましたか。お元気になりましたか。いつもいつも気にかけています」

私は二、三日調子が悪く鉄平さんとも会っていませんでしたので、また手紙がきたのだと思いました。

「私、ある夜、夢を見ました。ある日、遠いところから子供たちの歓声や笑い声が聞こえます。私の心の中で『この小さい灯を消さないで。この子供たちは頑張っているのに、私も子供たちも頑張っているのよ』だって身体が苦しく痛い。目をつぶると暗闇の中から白い羽をつけた若い天使様がおりてくるの。私はその天使様にお願いした。『あの子供たちの灯を消さないでほしい』それと私の苦しみ、悲しみ、痛みを早くどけてほしいとお願いした。

天使様はこう言った。「子供たちの灯は消さないでおこう。だけどあなたの苦しみ、悲しみ、痛みはもう少しの我慢だ。それとなあ～、そんなに言うなら、大天国の神様へ、天国行きの汽車のキップをお願いしておこうか。だけど一度大天国の神様と会わねばならない。だから私と一緒に大天国の神様のところへ会いに行こう」といって私の手を引っ張って、どんどん空を飛んでいるのです。雲の上につくとそこには、ぽっかり雲の上に浮かんでいる白がありました。私と天使様はその城に入ると、門番が出てきて「なんだお前は」と言うと天使様は「じつは大天国の神様に会いたいのですが」と言うとその門番は「そこの庭で待っておれ」。そこの庭は、薄暗く、雲の灰色の色の庭です。しばらくすると、大きなドアが開き、そこから光が出てくるのです。暗くて黒い庭もぱあっと明るくなり、まぶしい

ぐらいの光の中から大天国の神様が出てきたのです。若い天使様はひざまづき頭を下げていました。私は突然だったのでみとれて立ったままでした。若い天使様は私の服を引っ張るのです。すわれ、すわれとの合図です。私は我にかえり、天使様がやっている真似をしました。

突然、大天国の神様は若い天使様にこう言いました。「お前、その若い娘さんを幸せにするか」と聞きました。天使様は「絶対に幸せにします」「娘さんはどうかね」とやさしい声でたずねられましたが、私はこの天使様も知りませんでしたので「私はわかりません」と返事をすると、天国の神様は怒って「まだお前は無理だ」と言ってトビラの中に消えていきました。私は天使につれられ、大空を飛んでいました。それはそれは青い空で、太陽の光がまぶしいぐらいの澄み切った空です。その空の途中に小さな雲がありました。天使様は「その雲で休みましょう」といって、その小さな雲の上で休んでいると、天使様は「まだまだ天国行きの汽車は満席みたいだ」「でも天国の神様にお願いしてみましょう」「だが今は、我慢、我慢だ」と言って消えていきました。

それから不思議なことに数日後の夜、寝ているとその若い天使様が現われ、こう言うのです。「天国行きのキップがとれました」「早く。今夜天国行きの汽車が出るよ」いそいで私はすぐその汽車に飛び乗りました。不思議なことにその汽車に乗ると、うそのように苦しみも、悲しみも、痛みも消えていったのです。汽車は白い煙をはき、雲の城を抜け、どんどん輝く星の群れも抜け、宇宙の中を進むのです。すると小さな輝く星が見えてきます。汽車はその星に近付いていくのです。その星には地球と同じような、緑の森があり、美しい山々が広がり、小鳥のさえずる声、小川の流れる音、花が咲いている中、大きな舞台があり、そこでは、動物たちが歌を唄っているのです。私もみんなと一緒にその大きな舞台の上で頑張って歌を唄っているのです。そんな姿が見えるのです。私は若い天使様にありがとうと言うと、その若い天使様は笑顔で手を振って、来た汽車に乗って雲の中に消えていったのです。

その時、ふっと目が覚めた。そこには、いつも来てくれる先生が立っていた。すると、私の腕に点滴が刺されていた。「なんだ〜夢か〜」と言うと先生は、笑顔で「よく眠っていましたね」の言葉。

私にはまだ苦しみ、悲しみ、痛みも続いている。でも頑張っていかなくてはと想っている。　　奈美より

二回目の手紙には今まで言わなかった、苦しみ、悲しみ、痛みの言葉である。本当に苦しみ、痛みが始まったのだと思い、おもわず涙がこぼれてきた。

（五）父鉄平が娘への想い

しばらくして奈美の父さん鉄平さんが私の部屋に来て、こんなことを語る。

「奈美が一時退院した時、僕と奈美、一緒に家のまわりを散歩に出かけ、その時は夏の夕暮れ、まだ蒸し暑く肌にまとわりつくような風を感じました。『暑くて、いやになるなあ～。もうちょっと涼しかったらいいね』と僕が奈美に言ったとき、奈美がこう言うのです。『なんで、ぜいたくなことを言うの、父さん。この風が感じられることはどんなに幸せか。人は生きている。時に小さな幸せを見逃してしまうのよ。風のなさを感じ風の若さを感じ小さな幸せを感じるから大きな幸せを感じると想うの』と奈美は表情を変えず話すのです。そんな時は、まいりましたよ、僕は娘に教えられましたね……それは、やはり死と向き合った人の言葉だと僕は感じました。過酷な毎日が続き、病気とも一人で闘ってきたから自然に出た言葉と想う」と鉄平さんは私にしみじみ言った。

また鉄平さんは言った。

「無菌病棟にいる子供たちも自分たち、自分と同じ病気で入院している。同じ検査をし、同じ治療もし、その目の当たりにしている、つらいだろう。娘は自分が元気になったらこうした同じ苦しみの中で闘っている人たちのためになにか活動していきたいと願って、生きていることへの希望は前向きで歩こうとする強い勇気があったのです」と父親鉄平さんは娘の想いを語っている。

私は想った。奈美さんは家族の愛を受け、他人を想い、笑顔をたやさず、急性骨髄性白血病との闘い。

発病して十ヶ月の短い「いのち」をたった一人で闘ってこの世を去っていったのです。当時二八歳でした。

ここに奈美さんの詩があります。

「いのちをあげよう」

抱いてあやした子よ
なにもねだらない
小さな男の子
いのちをあげよう
生まれたくないのに
生まれた、お前が
苦しまないように
いのちをあげよう
恐れを越えた恋
愛し合い、生んだの

素敵な夜
生が燃えて、私が燃えて
あげよう私に無いものを
大人になって、つかんだ世界
神さまの心のまま
望むもの選ぶの
つかまえなさいチャンス
いのちをあげよう
目覚めれば
悲しい、人影がよぎる
でも……
月明りだけ
幻だったの
泣かせに来るだけ
だけど……
ここにいる
彼の子、
あの人を返して
神さまの心のまま
望むもの選ぶの
つかまえなさいチャンス
いのちをあげよう
お前のためなら
いのちをあげよう……

奈美さんの最後の詩に、

最後のお別れが来ても
どうか、泣かないでください
泣かないで、最高の笑顔で
見送ってください
そして……
私がいなくても
その笑顔を忘れないでください
ずう～と、ずう～と、
永遠に笑顔でいてください

私は魂となって
生きているのですから……
泣かないでください
お願い。
笑顔が一番です。

（六）私の想い

当時二八歳でこの世を去っていった奈美さんがよく言っていた言葉、「新しい挑戦をすることによって、新しい自分に会うことができます」。新しい自分に会うことは、より輝いている自分を持っていること、そして、挑戦することです、という彼女の考え方は、たえず前向きな姿勢につながっていました。

その道程は、まさに一歩一歩を大切に歩んでいくような日々。時には大きな壁にぶつかり、失敗することもありました。しかし、彼女は自分が挑戦してきた道に関して、何一つ後悔することはなかった。そこで得たものが次の道へつながり、ステップできるということを信じてきたのです。

彼女のメッセージ。それを多くの人に伝えたいと想いながら誕生しました。彼女が日頃から大事にしていたのは「みんなと手と手をつなぐことよ」という気持ちでした。

恐れ、なにも挑戦できずにいた人にとって、それぞれの人の心を動かす力になれば……。そして、孤独のなかで迷子になってしまった人には仲間として手をさしのべたい彼女のメッセージが、勇気や希望、光となり、生きる力の一つになっていくように思えてなりません。私もその一人に過ぎません。

人は、誰しも本当に頑張って生きる。その新たなる力も注ぐことで間違えたことが見える。それぞれが前向きなことを感じ、明日への一歩につながっていくことが彼女の願いでした。そして自分自身は、とても強いけど、人に対する優しさは惜しみない人でありました。亡くなってなお、いつもそこにいるような、安心感を与えてくれます。それは無限であり、私を支えてくれるような気がするのです。そして彼女が何を伝えたかったか。それは生きることの大切さです。

白血病の告知を受け十ヶ月間という、過酷な闘病生活に耐えた彼女は毎日、勇気と希望に向かって全身全霊で闘っていたのです。

いつも笑顔を絶やすことなく懸命に生きようとした彼女は、小さな幸せという言葉の中を私に教えてくれたのです。

小さな幸せとは、今、生きていること、そしてそれぞれが「一番の大きな幸せを……」と朝目覚めたとき、その目に見えること、音が聞こえること、歩いていると風を感じること……これは彼女がよく言っていた言葉の一つです。

私は毎日、痛みに耐えて生きていること、毎日この箱の中で暮らしていれば当り前のよ

うに見過ごしてしまうことや、自然の中にも小さな幸せは沢山ある。それを幸せと感じられる、自分になりたい。彼女は生きる大切さ、その生きる喜びを伝えたいと願っていたのです。

最後に彼女が言った言葉があります。それは「人はみんな、生きるために、生まれてくるのです。だけど、人は困難に直面したとき、悲しみに打ちのめされ、絶望してしまう。だけど、あきらめないでほしい。希望を見失っても立ち止まってもいい。ゆっくりでいいから、もう一度勇気を出して前に向かって歩いてほしい。だって、あなたの中に『いのち』は輝いているのだから……」と言っていた。私も同じことを考えていた。

第二章　母親の想い

私が脳内出血で倒れ入院していたとき、私はかりのひまがあり誰も友達もいない、話す相手もいないので、練習と思い、少しずつ車椅子を動かしながら病院のロビーにある一般の人が出入りする待合室にいた。その時、三四、五歳だろうか、美しい女性が五、六歳のかわいらしい女の子を連れていた。少し目が不自由なのか目を閉じたり開いたりして母親のひざにもたれている。女の子が私の方を向いているが、なかなか見えないようだ。長い時間、診断を待っている。私はなんとなくその女性に声をかけた。

「長い時間待ちますね」と聞くと、

「そうですね。だけどこの子の主治医の先生は今、病院中でこの子に関しての会議をしてくれているので、仕方がありません」

と、悲しそうに言った。その後、

「私は今度、小学生なの」と、かわいい女の子は言った。それからしばらくして、先生らしき人がその母さんとなにやら話をしている。私には遠くて話していることはわからない。待合室の外である。女の子は待合室で待っていた。私はその女の子にいろいろな話をしたが、目は話している途中でも閉じたり開いたりしている。

その時である。待合室に大きな字で書かれたポスターがあった。

「おじさん、ここに何が書いてあるの」と聞かれ、私はびっくりした。かなの大きな字で、小学校に入る子ならわかる字だ。その字は「しずかにしてください」と書いてあるだけだ。私は読んでやった。女の子は「うん～」と返事。「おじさん。私、おじさんの顔も、ぼやけてあまり見えないの」と言った。あどけない顔で淡々と言うのです。そうしているうちに、母さんが帰ってきた。

「本当にありがとうございます。この子の話し相手をしてくれて」と頭を下げ、診察室の方に入っていった。

女の子は私の方を向いて、手を振ってくれた。片方の手は母さんの手をしっかり握っていた。母さんに引っ張られるような状態であった。本当に目が不自由なんだと思っていた

とき、看護師さんが呼びに来たので、私はリハビリ室に入っていった。
リハビリ室は病院の一階のロビーを通って奥にあるので、よく待合室でリハビリの来る時間を待っている。私のリハビリは一時間ぐらいだ。リハビリが終わり、待合室にあの母子がいるかなと思っていたが、いなかった。まだその女の子と母さんの名前も聞いていない。どこの人かもわからない。わかるのは美しい女性、かわいい女の子、だけである。また会いたいと思いながら部屋に戻った。
翌日、その親子に会えるかなと期待して、その時間帯にロビーの待合室に行ってみた。その日は会えなかった。次の日に行ってみた。するとその親子は、待合室にいるではないか。私はその親子に見えるように待合室に行くと、美しい母さんから「この間はありがとうございます」と言われ、私は照れくさくて隠れる場所もないくらいでした。
その時も検査の日で、待つのに時間がかかるそうである。その日はリハビリの客も多く、時間がかかるみたいであったので、母さんも順番の時間を聞き、私もリハビリの先生に聞くと、あと一時間はかかるとのことでしたので、病院内にある喫茶店にその親子と一緒に行くことにしました。母さんは私の車椅子を押してくれました。他の人から見ると、その母さんは私の娘で、かわいい子は孫だろうと思うに違いない。たぶん、見舞客に見えるだろう。名前はさゆりさんとリカちゃんである。私とさゆりさんはコーヒーを飲み、リカちゃんはジュースを飲みました。私はさゆりさんに自分のことを話し、リカちゃんの病名を聞くと、リカちゃんがいるので話してくれませんでした。
でも、いろんなことを話しているうちにすぐ一時間がたち、さゆりさんと次に会う時間を約束して、私はリハビリ室へ、さゆりさんとリカちゃんは診察室の方へ。その時さゆりさんが「少し時間がありますので」と言って、私の車椅子を押してくれてリハビリ室の前まで連れて行ってくれました。その時、リカちゃんが「バイバイ。またね、おじいちゃん」と言ったのです。それを見ていたリハビリの先生に「お孫さんですか」と聞かれましたが、「違います。偶然に待合室で会った人です」と言うと、先生は「お孫さんのように見えますね」と笑顔で言ってくれました。私はうれしいような、複雑な気持ちになりました。本当なら、あのくらいの孫がいてもいい歳です。
次のさゆりさんと会う日がやって来た時、リカちゃんはいませんでした。今度は病院内の喫茶店で会うことにしました。いつもならその喫茶店はお客で満席ですが、その日は土曜日のせいか待合室もその喫茶店も、あまり人はいませんでした。私のリハビリもなく、さゆりさんも時間がありましたので、ゆっくり話すことができました。さゆりさんは私に言いました。「リカは、おばちゃんのところに預けています。それと、リカは脳腫瘍の手術を受ける際、いのちは取り留めましたが後遺症が残り、だんだん目が見えなくなっていくと主治医から言われたのです」と涙ぐんで話してくれました。先生から「今はまだ見えていますが、後日二ヶ月、三ヶ月たってくると、遠いところからだんだん見えなくなってくると思いますね」と言われたそうです。
私は、はっと思いました。あの時です。目を閉じたり開いたりして、「おじさん、ここに

何が書いてあるの」と聞かれたことを思い出しました。そのことをさゆりさんに言うと、さゆりさんは寂しそうに「そうですか、本人は分かっているのですね」。

さゆりさんは「リカの目が見えなくなったら、どうしてあげようと考えています」と言っていました。こんなことも言っていました。「目が見えない人の役に立つ人になりたい。そして、目が見えない人の介護を通してリカの母親になりたい」

と言っている時、喫茶店の窓から目の不自由な人が、介護士さんに手を持ってもらい、病院の窓に誘導されるのを見た。私はその時、目が不自由なのに外が見えるのかなと思った。さゆりさんと私と沈黙が続いていたときです。その目が不自由な人が介護士さんに「外は曇りですね」。また、「冷たい雨がきますよ」と言っていた。外は晴れているのに、そんなことがわかるのかなと思っていると、突然、雲が黒くなり、外は暗くなって雨が降り出してきました。私は不思議な気持ちになりました。

その時、さゆりさんが「しまった。早く帰らないと大変だ」と言って、次の土曜日に会う約束をして、さゆりさんは慌てて帰っていきました。

その後、さゆりさんに約束した土曜日に会いました。その時、さゆりさんの話によると、リカちゃんのため、移動介護従事者の資格を取り、ボランティアを始めたと言う。移動介護従事者とは、視覚障害者の買い物や通院など……に付き添い介助する人。

「歩道に段差や危険な場所があればそれを知らせ、目の不自由な人の外出はこころしまる気持ちの連続です」と言う。そして、さゆりさんは語る。「ある日、誘導する相手を守ろうとするあまり、自分の身体を電柱やガードレールにぶつけたのです。その瞬間は持っていた手、その加減に相手が身を気遣い守ろうとしている、気付いて、つまずき、その時、全身で懸命に起こしてくれたのです。人は目だけでなく、見えないものがつながる手からじんじんと伝わってくる思いやりで、胸が熱くなってきたのです」

私はその時、思った。

私は、左半身「マヒ」で動かない。でも、私たちは目が見えるから、時間も平気でギリギリまで使っている。目の不自由な人は時間を大切にしている。だけど、人と人の関係が一方通行で終わることが多い中、さゆりさんのように、我が子が目が不自由になっていくため、他のことまで思う豊かな心は誰にもできないことであり、これからも我が子のため、他人のために頑張っていけると思う。本当の母親という女性は強い、私はさゆりさんの話を聞いて、涙が少しこぼれていく思いだった。

そして、さゆりさんの話を聞いて喫茶店で別れた。今度さゆりさんとリカちゃんがこの病院に来てくれることを楽しみにしている。さゆりさんは、リカちゃんの身体が調子のいいときは連れてくると約束してくれた。私も頑張らなくてはと思ってリハビリにはげんだ。

そんなことがあって、私もどんどんリハビリに頑張り右足右手は動くようになり、病院内を杖をついて歩ける状態にもなっていった。ある日、さゆりさんとリカちゃんがやって来た。その時はもう私は杖をついてゆっくり歩いている、それを見たさゆりさんはもう目が見えないリカちゃんに「リカ、おじさんももう杖で歩いている」と言った。リカちゃん

も「私もおじいちゃんのように頑張らなくては」と言った。私は本当の孫のような気持ちになった。三人で喫茶店により、リカちゃんの話や、さゆりさんの家族の話を聞いて楽しく二時間あまりが過ぎた。

そのときリカちゃんが目が不自由なのに一枚の詩を渡してくれた。「おじさん。リカがまだ少し目が見えるとき書いた詩です」と言ってくれた。その詩は今でも大事に持っている。

母さん手を持って
だんだん、目の前が
薄くなって
遠くが見えにくくなってくるの
歩くのがこわいの
母さん手を持って
また
私の前を
誰かがとおって行くの
だから
母さん私の手を
しっかり握って
私は歩くのがこわいの
風が私の顔をさわって行くの
私の目の前に
誰かがいるの
だから、しっかり
母さん、手を握って
私は
母さんの手の温もりが
私の手に伝わってくるの
お母さん
手を
はなさないで
お願いだから……お母さん。

リカより

私はその詩を読んで涙がこぼれてきた。リカちゃんが元気で、目が不自由でも一筋の光があることを祈っている気持ちでいっぱいになった。リカちゃん、さゆりさん「ありがとう」、私に勇気をくれて。あなたの笑顔を見たい気持ちだ。

＊おわりに

この文章は私が病院に入院している時に出会った人との体験と話を聞いて感動し涙がこぼれたことを書きました。いたらぬ点が多くあったと思います。あしからず。

今後も短い体験談、小説、詩、エッセイなど、私の身体が許すかぎり書いていきたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。